多様性ということ
江津市立桜江中学校　一年　　氏名非公表

皆さんは、ＬＧＢＴＱ＋という言葉を知っていますか？Ｌはレズビアン、Ｇはゲイ、Ｂはバイセクシュアル、Ｔはトランスジェンダー、Ｑはクエスチョニング、の言葉の頭文字を取ったものに、＋（プラスアルファ）を、足した言葉です。

僕は、この中のＴに当てはまると思っています。トランスジェンダーとは、体と心の性別が違う人のことです。僕の場合、体は女で心は男です。この事に気づくのは人それぞれですが、僕が気づいたのは、小学五年生の時でした。

友達が、性別の違和感について話をしていたときのことです。友達の話を聞いているうちに、自分と重なる部分があり、「もしかしたら自分はトランスジェンダーかもしれない」と思いました。

そのときは、「家族になんて言われるかな」「友達は、きっと受け入れてくれるけれど、他の人はどうかな」と考えました。だから、不安な気持ちを友達と担任の先生に相談しました。友達も先生も、僕の話をよく聞いてくれました。「男だろうが女だろうが、ＹはＹじゃん。」と言ってくれた友達の言葉が、とても嬉しかったです。みんな優しくてありのままの僕を受け止めてくれて嬉しかったです。

僕の友達には、僕の気持ちをよくわかってくれる人が二人います。一人は、一番最初に相談した人、二人目は、僕の親友です。やはり、周りに自分を理解してくれる人がいて、嬉しかったし、安心しました。

中学校に入って、生活が大きく変わりました。それでも、中学校にも小学校の時と同じように、「一人で着替えたい人の部屋」が準備されていました。また、今年から制服が選べるようになり、誰でもズボンとスカートを選べるようになりました。これまで自分が「嫌だな」と思っていたことが、中学生になって、少し減りました。「自分が選びたいことが、選択肢にあり、誰でも選ぶことができる」ということが、とても嬉しかったです。

僕には、嫌な体験もあります。

一つ目が、母に言った時のことです。「ズボンを買ってきて」とお願いした時に、「女の子として生まれたんだから女の子として生きなさいよ。」と、言われてしまいました。悔しくて、悲しかったです。

二つ目は、ズボンを履いて学校に行った時のことです。下級生に、「なんでズボン履いてるの？」と言われたからです。僕にとってのズボンは、「誰でも履いていいもの」なのに、その子にとっては、「男子が履くものだ」と決めつけられていました。「ズボンは男の履くものだという固定概念だな」と思いました。このような決めつけには傷つきます。

でも、クラスの友達は違って、「似合うよ！」や、「いいね！」などと、温かい言葉をかけてくれました。嬉しかったです。

一人称の使い方も同じです。僕が自分のことを「僕」と言っていたら、「なんで僕って言

うん？私って言いなよ」と、下級生に言われました。それを聞いてた友達が、「別にいいじゃん。君も、自分のことを自分の名前で言ってるでしょ。」と言ってくれました。自分の気持ちを分かり、間違ったことには言い返してくれたことが、嬉しかったです。

三つ目は、勝手にぺらぺら話されることです。カミングアウトは、すごく勇気がいることです。それなのに、勝手に他の人に話されて自分の知らないところで広まって、同情されたり差別されたりすることはとても嫌です。やめてほしいです。

このように僕が傷つくときは、「女だから〇〇」とか、「女なのに〇〇」というような時です。逆に、いつもどおり接してくれると嬉しいです。

僕みたいな人がいて、何気ない会話で傷つくことがあります。それは、誰でもそうだと思います。でも、その言葉を発する前に、「自分はその人に何を伝えたいか」「それは言ってもいいことなのか」をよく考えて、発言してほしいと思います。

これからは、決めつけや偏見をなくし、周りをよく見て、一人ひとりの個性を認め合い、大切にしていきたいです。

今、母も、家族も認めてくれているので嬉しいです。

僕にとって多様性とは、性別や障がいなど関係なく、一人ひとりのありのままを受けとめ、個性を認め合っていることです。多様性が当たり前になる学校に、自分ができることから、していきたいです。